

＝聞き取り調べ＝

【調査日】平成26年3月8日

【話者】N. K (樺太アイヌ＝エンチウ)

※写真、資料を見ながらの会話部分は、内容不明のため省略。

聞き手A : 生まれはどちらですか？

N. K : 青森県。

聞き手A : ご兄弟は？

N. K : 9人の末っ子です。

聞き手A : ご両親は樺太のかた？

N. K : はい、そうです。

聞き手A : お名前はお聞きしていいですか？

N. K : お父さんはD、お母さんはT。母が樺太アイヌ。

聞き手A : お母さんの生まれは樺太？樺太のどのへんですか？

N. K : 西海岸。真岡郡多蘭泊。

聞き手A : お母さんのほうのお父さんとお母さんは？

N. K : 西海岸出身なので、祖父の名字はN、祖母の名字はありません。

聞き手A : 樺太アイヌのことは、お母さんからよく聞いてたんですか？

N. K : そうだね、でもあんまり昔のこと話さなかったからね。

聞き手A : 結婚して青森に行かれたんですか？

N. K : 戦後、父の故郷に行って、そのあと父はまもなく亡くなって、母は私が子どものころ育ったところに樺太の人が引き揚げてきて村を作ってるから、そこに行けば親戚もいるし知り合いもいるし、家も当たるし土地も当たるし、そういう風の便りを聞いて行ったんですけど。そこが稚咲内です。

聞き手A : 実際は？

N. K : 当たるわけじゃないじゃん。樺太体験記というものに——樺太に行ったときにサハリンスクにある博物館館長が、なんでもいいから思ったこと書いてっていうから送ったんですよ。それをある人が聞きつけて、どうしても載せてくれないかっていうから…載ってるんですよ。

聞き手A : N. Kさんは、小さいときから自分は樺太アイヌだっっていうことはわかっていましたか？

N. K : 実際、アイヌだよってはっきり親から言われたわけじゃないけど、育ったところが周りがアイヌの人ばかりだったから、なんとなくわかっちゃうのよ。だって、大人の人たちは時々アイヌ語やロシア語も話していたから。

聞き手A : それは何歳くらいのとき？

N. K : うーん、何歳くらいのときだろう。

聞き手A : ご両親は、どういうお仕事をして家を守っていらっしゃいましたか？

N. K : 樺太アイヌは昔から海の民って言われてたから、農業なんてしてないですから。多蘭泊っていう地名の由来は、鮭がたくさん集まってるのぼる川。入り江になってるから。そこの奥に入ったところに鮭の孵化場があって、今もそれ使ってましたけどね、そういう漁業ですね。山へ行って木材を切って、そういう仕事に携わる人たちの飯場を切り盛りしてました。恵須取というところですよ。

聞き手A : そのとき、病気が流行ったとかありますか？

N. K : 明治8年に宗谷に強制移住させられて、翌年の明治9年に宗谷から江別の発祥地である対雁に連れて行かれ——宗谷岬から天気のいい日は樺太が見

えるんだよね。当時北海道長官の黒田清隆も——日本の二代目の総理大臣になった人なんだけど、船に乗って樺太に帰るアイヌがいたら国際問題にもなりかねないということで、内陸に連れて行って、それまで農業経験のない樺太アイヌに農業を強いたんです。アイヌの人たちは、大きなコタン（集落）を作りません。せいぜい5~6軒のコタンを作って、ところどころに離れて住んでただけど、それがおんなじ場所に856人。宗谷に連れてこられた時は841人だったんだけど、子どもが生まれたりして856人になってました。でも、宗谷から小樽に…船に強制的に乗せられた時にも警官が付いて空砲で脅かされたりして、1人が船内で怒りのあまり血を吐いて亡くなった。そういう歴史もあるんですよ。そうやって対雁ではいっぺんに同じ居住区で住まわされたから、疫病が次から次とうつつて、たくさんの方が亡くなった。コレラなんて別名コロリって言って——発症して三日で亡くなるからコロリって言うんです。そこで亡くなったアイヌが300何人っていったかな？でも…本当にいいところに連れて来られたんだったらね。今行ってみたら居住区があった場所は半分石狩川になってる。あとの半分は河川敷になってる。ほんとにいいところだったら、今ごろもっと栄えてるはず。戦後に樺太の引き揚げ者たちが——主に樺太アイヌがいっぱいいろとこで生活したのは、サロベツ原野からもっと海岸に出た稚管内。いい天気の際は利尻富士が見えているような風光明媚な場所ですが、実際に生活するにはあまりにも過酷な場所でした。私の母が言うには、なんでこんなところに来たんだろうって。砂浜に出てワンワン泣いたって。母は生前なんでも書き残してる。それを見るたびに——涙なくしては見られない。そういう生活を送ってた。だから子どものころの思い出たら——恥ずかしい話けどお腹を空かしてばっかりだったね。だから学校の帰りになれば、オオハナウドとか食べれる時期になると道端で採って皮を剥いて食べたり、そういうことばかりしてたね。貧乏人なんて言われるかもしれないけど、実際にそのような生活を送ってた。

聞き手A : お母さんは縫い物したり…アイヌに関することって覚えてたりしてますか？

N. K : なんでアイヌのことをあんまり語らなかったかというと、樺太アイヌが北海道アイヌと違って、引き揚げてきて早く日本人になろうって…アイヌのことを語らない。隠してるの、逆に。

聞き手A : 隠れても、お母さんはそういうことしてなかったのかな？

N. K : 生活に追われて今日明日をどうやって食べるかって、そういうことばかりだったから。稚畠内ってところは…日本海側のとってもニシンが獲れてたところ。昭和 29 年くらいまではすごい獲れてたの。それを過ぎるとピタッと獲れなくなって、それからが大変だったの。生活に関係して。今ごろの時期、オホーツク海側に流氷がたくさん流れて、はるか一千キロの旅をしてオホーツク海に流れてくるんだけど、たまに潮の流れとか風の変動で日本海側に流れてくるときがある。流氷とともにいろんな食べ物が一緒になってついてくるわけ。昆布が流れてきたりね。砂浜だから、ほんとに岩礁ひとつあるわけじゃなく。すぐ近くの抜海っていう浜では、アザラシがいっぱい来るんだよ。今はとっても嫌われ者なの、魚ごと網を食い散らかしたりして。要するに、流氷流れてきたら嬉しかった。普段見たことのないようなものが砂浜に打ち上げられるから。そういうとき、みんなで浜に行っ、なんでも拾ってきて食べてたな。

聞き手A : ちょっとした疑問なんですけど、Kさんのお母さんなのかお父さんは、親戚になりますよね？

N. K : 私の姉。

聞き手A : 何番目の？

N. K : 一番上。私が一番下。I だとか。K の母親とかM とかは姪っ子に当たるの。

聞き手A : Iさんと姉妹になるの？

N. K : K.MのおばさんがI.K。私が…何になるんだ。Kの母親が私の姉だからね。Mのおばあちゃんが私の姉。

聞き手A : お姉さんがいるから、今の私があるって仰いましたけど、それはどうしてですか？

N. K : 私の母はいっぱい子どもがいたから——樺太は食べるものなくて大変だから、父親が仕事探しに行っ、何日か帰っ、こなかったみたい。その間、食べるものが何にもなくて。子どももいて自暴自棄になってたのかね。当時 2 歳になった姉がいて、その子を抱っこしたまんま母親が川に入水したみ

たい。そのときに今言った一番上の姉が、「母ちゃん、母ちゃん！」…て叫んだんだって。それは当事者じゃないとわかんないと思うけど…聞いただけでわかんないと思うけど、私はわかるの、ずっと見てたから。その声でハッと気づいて…今自分の赤ん坊と死んでも残された自分の子どもたちを考えたら大変なことするところだったって。母が亡くなる前に書いたものを…いろんなものを書いて残してあるから…生きているうちに見とけば良かったんだけど、亡くなってから思い出しては読んだり…そのたびに涙を流してね。苦勞をして私たちを育ててくれたんだなって…感謝してる。そのことを…いろいろと書いて、ユジノサハリンスクまで手紙に書いて送ったのです。なんでも小学校も満足に出てない母親なんだけど、字を覚えてんだよね。今の字は昔みたいに難しい字はないけど、私にも読めないような字を書いて残してある、何ページにもわたってね——自分の子どもたちの生活を。よその子どもの面倒見ながら学校行ったとかね、おしんと同じようなことしながらやがて大人になって、私たちを育ててくれたんだなって。

聞き手B : Aさんが言ってたんだけど、赤ちゃんおぶって学校に通ってるって。

N. K : いたいた。私の子どもの時もあったもん。弟や妹をおぶって学校に連れてったもん。泣き出したら表に連れてったり。先生もなんも文句言わないよ、事情わかってるから。宗谷管内の先生たちはアイヌのことを一切触れないようにって教育を受けてるんだって。その当時はわかんなかったよ。のちのちになって——先生と姉たちなんかはいろんな交流やってるから、90歳近くになる先生たちの話を聞いたら、そういう教育を受けてみたい。信じられないような話だけどね。私は末っ子だったから、弟や妹を連れてくことはないけど、逆に兄たちに「おんぶして行った」…ってよく聞かされて。大変世話になったって、笑いながら言ってたことあるけども。そういうことは日常茶飯事で、なんにも珍しいことではなかった。それでお弁当持ってきてる人は幸せそうだったね。ご飯なんてないんだって。隣の村まで行ってね、隣の村は報徳っていうんだけど、そこにはジャガイモ作ってる。自分たちのとこででんぷん作る工場があったから、そこに行って2番粉3番粉って黒くなった粉を…表に捨ててあるの。それを拾いに行くたって何キロも（距離が）あるんだからね。黒いでんぷんで作った片栗粉っていったらいいのかな、それで母がお団子作ってくれるのね。朝蒸してくれるんだわ。温かいうちはまだいいのね。昼になるとヒビ割れて、食べれば堅くて。それでもお弁当を持っていった子は良かった。持っていけない

ような子なんて本当にかわいそうで、窓の縁に座って黙って食べてんの見てたんだ。私も何回かあったけども恥ずかしくてね。昔、弁当箱ってアルミ製かブリキだったっけ。そうやって食べたもんだ。学校帰りもお腹空きすぎて気が遠くなるわけ。学校のすぐそばに立ち木があって、グラウンドでみんな遊んでる…子どもたちがね。すぐそばの木登ってよしかかっているの、お腹空いて。すぐそばで遊んでる子どもたちの声ははるか遠くにかすかに聞こえてくるの。お腹空きすぎて気が遠くなってくの。よっぽどすごい生活してたんだって思われるけど、毎度毎度ではないけれどそういうこともあったな。ニシンが獲れなくなってからが悲惨だったね。磯舟ってわかるかな、小さな舟。大きい船はニシンとか大きいものを獲るときに。磯舟は沖まで行かないで獲る時に。私も小さいときに一緒について網起こして手伝って…豊富町から自転車に乗ってお店のご主人がうしろと前にいるんな小麦粉だとか干し乾麺とか積んでくるわけ。舟が上がるの待ってるの、浜で。上がったら物々交換。それが楽しみだったの。ブドウでもなんでも食べれるって、子どもながらに。お魚さえ獲ればね。おやつ…ったらまわりにある自然だね。ハマナスだとか、野イチゴ、ヤマブドウ、クワノミ。買ってなんか食べれるわけないので。

聞き手A : 遊びはどうですか？〇〇（イベント）で笛吹いたりしてたでしょ？子どものころの遊びなのかな？

N. K : 周りにあるものがみんなね。稚畷内の隣にオトンルイって部落があったんだけど——今は消滅してないんだけど、今、海岸に風車が何十基って並んでるの。ほんとに昔と様変わりしちゃって。

聞き手A : 結婚する前に、こういう樺太アイヌの活動はしてました？

N. K : ニシンが獲れなくなってから、それまで使っていたニシン釜を売って汽車賃にしたら、今まで聞いたことのないことを耳にしたの。朝鮮人を馬鹿にして、馬鹿にされた朝鮮人が返した言葉は「朝鮮、朝鮮って馬鹿にするな、同じ釜の飯を食ってどこが違う」…って。朝鮮人だってわかったら馬鹿にされるんだなって。私も子ども心にも…アイヌだってわかったら馬鹿にされるんだなって。黙って言わないでおこうって。それから誰にも言わなかった。アイヌだってわかるってことは、毛が濃いか…それが隠しようがないわけ。昔は本当に隠しようがないくらいあったもんだから。お姉ちゃんの眉毛ってまるで侍眉毛だねって言われて、バカにされたようなことを言われると、ド

キッとして返す言葉がないのね。ただ悔しくて睨みつけることしかできなかったの。夏になって半袖になると、染めてみたの…金髪に。腕の毛とか。それでもまた元に戻るし。本当のことと言われると反論できなかった。今だったらできるかもしれないけど、若いころはやりきれない。ただやりきれない悔しさが残る。だから結婚する時は主人にもアイヌであることを告げずに隠しとおしてきたけど、ある日従兄弟のT2が遊びに来て、主人の前で「アイヌの活動があるんだけどやってみないか？」…って話し出して、それで今まで隠してきたのにドキッとして、ただただなんにも言われませんようになって。結果、何も言われなかったけどね。

聞き手A : あと、これからの伝承について…アイヌならアイヌってひとくくりになれたり、樺太アイヌも含められたりとか…いろいろな想いがあると思うんですが、これから樺太アイヌとしてしたいことってありますか？

N. K : 樺太に私たちの繋がりが今でもあるんだから…例えば樺太に行った時には、T2とかばあちゃんとか父親と一緒に帰って…自分たちの住んでいた場所は多蘭泊だとわかってるわけだから…例えば…自分たちの使ってた井戸は現在でもロシア人が使ってるの。ここで生活してた拠点だってわかるのね。当時の親戚の家だって残ってた。だから…親やおばあちゃんと一緒に行ったからわかるわけであって…ここで生活をしてたんだなって。うちの母親も、よく子どものころのことを書いて残してるの。その多蘭泊の浜に行って…学校から帰ってくると浜に行って遊んで…バケツひとつ持っていけば、貝なんかをいっぱい入れて持って帰ってきて食べてたって。アイヌはいろんな山菜知ってるから…これも食べれるってことわかってるから、山から山菜などを採ってきて、町で販売して生活の糧にしていたから。樺太行ったら、フキなんか背が高く足寄のラワンブキと同じような高さ。7時間もかかって列車に乗って行ったけども、至るところにワラビだとか…汽車から見えるの。それだけ自然が残ってるってこと。いつでもビザなしで行けたり…そこは口で言い表せないくらい自然が残ってるの。日本人がそこに行ったら、あっというまに自然が破壊されるんじゃないかって思う。ここだけの話なんだけど、西海岸に人がいないの——要するに私たち多蘭泊の出身者だけれども、明治40年に日本政府は樺太アイヌを10箇所を集めて漁師をさせて、そのひとつが多蘭泊なんだけど——入り江になってるから「トマリ」っていうんだらうけど…地図で見てもわかるんだけど真ん中に川があるの。その川上に行ったところに鮭マス孵化場があるんだけど、そこにT2の母親のRおばさんがそこで働いていて、結ばれて結婚。そこで一番いい女がRおばさん…って、そんな笑い話

があって。実際そこに行ってみたけどそのまんまで…すこし手直しはしてるんだらうけど。戦後…今年で68年くらいかい？まだ活躍してる。母は、明治〇年（40年代前半）生まれで生きてたら百何歳くらいなんだけど、その生まれ育ったところにはほんと自然が残ってて、当時は日本人が集住させていたから、たくさん人がいて家がびっしり並んでたけど、行ったときには10軒もなくって——ポツンポツンとしかなくて隣の村までに距離あって道が悪いかから、土埃がいっぱい窓も開けられない状況で行ったんだけどね、やっと村までたどり着いたら、たった一組だけ海水浴してたね。行くところ行くところ、みんなそうなの。海水浴シーズンだったの。日本では考えられない…一組だけ海水浴してるなんて。多蘭泊が過ぎてもうちょっと先に進んで、あまりに暑くて海にちょっと足だけでも入ってみたらびっくり。膝まで足入らないところに、ウニがゴロゴロ見える。エゾバフンウニだよ。それだけ自然が豊富で…豊かだっただけのこと。向こうの人たちは食べないんだと思う。獲っても輸出したり。昆布なんかでも肉厚で幅広で、日本に持って帰って食べたいなって。姉もおばあちゃんもこの近くで眠ってるし、みんなここで育って、ここで亡くなってる。お墓参りにも、当時は私たちの親たちが使ってたってお墓にも行って見たけど——低地なんだけど今はロシア人のお墓になってて、オオイタドリがいっぱいになってて、かき分けかき分け入って行ったけど日本人のお墓はなんにも無かったね。平成4年に〇歳（90歳代）のおばあちゃんをMがおんぶして、小高い山に登ってお墓参りして、「ここに移されたんだよ」…って——おばあちゃんがいたからわかった。だから高いフキをかき分けて…まるでコロポックルになった気分、蛇に何回か遭遇して探し当てて、昔の大地そのままのところに行って、たぶんここじゃないかって石が置いてあって、何も持って来なかったから煙草に火をつけてお参りしてきたね。できることならビザなしで行き来できて、お墓参りしたいときはいつでもできますように——だって、向こうに残留日本人として残ってる人たちは2~3年に1回は交流しにこっち来てるんですよ。逆に私たちが向こうに行って、お墓参りでもなんでもさせてくれたらいいな。これが願いです。そしてお墓に行く道を、もうちょっと整備してね。そして後世に、ここにアイヌが住んでたんだぞっていう証をなんとか残したいなって思ってるの、できればね。でも眼の黒いうちは叶うわけないと思ってるんだけどね。今現在でも私たちの仲間が残っています——朝鮮人と結婚して日本に帰還できなかった人。実際に会ってきたもん、向こう行って。残念ながら会えなかったエンチウの人は…朝日新聞の記者の人が知り合いなんだけど、樺太に行ったらたまたま機会があって訪ねて行ったんだって。「稚咲内から来たのかい？」…って第一声に言われて、違いますって言ったら、「なんだ、稚咲内から来たんじゃないのかい。エ



ンチウじゃないのかい」…って言われたって。エンチウっていうのは、私たち自称エンチウっていうんだけど、どういうときにそういう言葉を使うのかというと、「あの人もエンチウなんだよ」…って、そういうときに使う言葉なの。あからさまに言えないからね。そういうのは、よく親たちが——周りのおばさんたちとか言ってたのを耳にしていました。北海道アイヌの人たちは、地元だから行きたいなって思ったらどんなことしても行けると思うけど、私たちは行きたいなって願ってるだけで実際に行くことはできない。近くても遠い島だね。飛行機乗って一時間で行けるんだもの…本当に近い場所なんだけどね。なかなか開発が遅れているのは確かだけれども、かえってそのほうがいいなと思ったね。なんせ自然が豊富に残ってる。ところが山の中でも峠の頂上でも——当時はソ連軍だったから——戦って日本に勝って、戦勝記念（碑）が至るところに誇らしげに立ってる。小高いところに高々と見上げるように。ここで戦って日本に勝ったんだぞ…って言わんばかりにね。腹立たしくなるね。レーニンの像なんて、（大きすぎて）そばに行ってもなんて見られないからね、遠くじゃないと。ユジノサハリンスクの街の中に立ってるんだけど。日本なんて、1人の大きな像なんてあんまりないと思うけど。

聞き手A : 例えば衣服だとかだと刺しゅうでも技法が違うと思いますが——樺太のものは鮮やかだったりすると思うんですが、そういった技術のことに対してはどうですか？

N. K : 実際には少しでもやってるんだけど、なかなか生活のために働いてたから…そこまではね。家庭のほうが重要視されてたから。これからあと何年生きられるかわからないからね。

聞き手A : 例えば、他の人や樺太アイヌのことを理解してくれる人に伝承したいと思いますか？

N. K : 私のこれからのやる作業としては、樺太の文様を題材にして復元とかを少しずつ。今までは、訓練受けてもやっぱり北海道のものばかりだったからね。少しでも復元をしたいなって思って手がけてやっているところなのね。でもちゃんとした先生がいないから、なかなか思うようにできないんだけど。

聞き手B : 戸籍謄本とか抄本とかは、一切ないんですか？

N. K :ほとんど日本人が逃げてくる時、役所の書類だとか焼いて逃げてきたって。わかる人なんて…たまにお寺で保管してたとかさ。北海道と違って、樺太はわかんないの。逃げるのが先決で。樺太体験記から見ても、逃げるとき苦労したとか命カラガラ逃げてきたとか目の前で人が亡くなったとか、まともに読んでられないのがたくさんある。樺太体験記を書いた人たちが「郷土を掘る会」…って言って学校の教職員してた人たちが定年退職になって歴史を勉強したいという人たちが集まって、それを——樺太体験記を募集したところ、もっと知りたいって人が集まって、今度「続」樺太体験記が増刊されて今度「続々」…って作られて、涙なくしては読めないほど朝鮮人のことも書いてあれば…様々なこと書いてある。気弱い人だったら、途中で読むのやめてしまうくらい。屋根裏に隠れてロシア人が攻めてきただとか。樺太には朝鮮の人が約三万人いるんだから。私たちが行っても、誰もジロジロ見る人なんかいない。朝鮮人と変わらないし。私たちは外人が来たら、珍しいからちょっと見たくなるけど。いまだに結婚式は…今どき日本でもやってないような車に花とか付けて缶カンを付けて走ってって…というのを今でもやってるの。そのユジノサハリンスクの博物館の隣が結婚式場で、そこにウエディングドレス着たまま写真を撮りに来るの。

聞き手A : そうなんだ～。この大切な資料、ゆっくり拝見させていただきますね。